外来語の色彩語について

――『青空文庫』パッケージを用いて――

村　中　淑　子

1．はじめに

現代日本語の語彙において，外来語は一定の地位を占めている。特に20世紀後半以降，量的増加が確実に起きているだけでなく，質的にも，広範囲・高頻度に使用される「基本語」に外来語が入り込むという変化が起きている（金愛蘭 2012）。

外来語が入り込む理由は何か。おおまかにみて，次の２点が挙げられる。

（１）それまで日本に存在しなかった具体物や，日本では名付けられることの無かった新しい概念などを表すため。

（２）同様の意味内容を持つ既存の和語・漢語にはない，新しい用法や文体的特徴を表すため。

言語はもともと流動的な性質を持ち，常に変化の可能性があることも，外来語の流入に関わりがあると思われる。

さて，色彩語の場合は，外来語の流入に関して，どのようなことが起きているだろうか。試みに「ブルー」「グリーン」「グレー」「ピンク」を辞書で調べると，それぞれ「青色。藍色。」「緑。」「ねずみ色。灰色。」「淡紅色。桃色。」とある[1)]。これらをみると，少なくとも指し示す色彩という点

キーワード：結合形と単独形，色彩名詞，指定性，描写性，なじみ度

では，外来語が和語・漢語と大きくズレているということはなく，ほぼ同義の言い換え表現となっているように思われる[2)]。つまり，色彩語における外来語取り入れの理由は，上記の（２）であるようにみえる。

ただし，色彩語はその色彩を持つ事物とともに入ってきた可能性もあるため，新物や新概念と全く関係がないとは言い切れない面がある[3)]。

本稿では，色彩語という分野における外来語に注目し，データに基づいた検討を行なう。以下，２章では，色彩語に関して，外来語とそれに対応する英語，および，対応する和語における出現頻度を概観する。３章では，10種の外来語色彩語を取り上げ，その１つずつを『青空文庫』パッケージを用いて検索し，明治から昭和初期にかけての用例を観察する。４章では，３章の結果にもとづき，外来語の色彩語が，単独形の出現の有無という観点から２つに分類できることと，その分類が「描写性」という性質の有無に対応することを述べる。５章でまとめ，今後の課題に触れる。

２．色彩語の出現頻度　―英語，外来語，和語―

本章では，色彩語の出現頻度を概観する。外来語と比較するため，対応する英語，および，和語における出現頻度もみることにする。

まず，英語における色彩語の出現頻度のデータをみる。内田富男（2014）では，500万語規模の話し言葉コーパス（主に UK 英語）である *The Cambridge and Nottingham Corpus of Discourse in English*（CANCODE）と，50万語の話し言葉コーパス（北米英語）である *The Cambridge Cornell Corpus of Spoken North American English*（North Am sp），および100万語の書き言葉（UK 英語）を収集した均衡コーパス *The Lancaster - Oslo/Bergen*（*LOB*）*Corpus* を用いた先行研究の結果を，下記のような表にまとめている。内田も述べる通り，３種類のコーパスにおける頻度上位11語は一致しており，順位も部分的に異なるものの，おおよそ一致している。ま

たこの11色は，Berlin & Kay（1969）の Basic Color Terms とも一致し，彼らのいう色彩語の進化段階の順序（white-black，red，green-yellow，blue，brown，purple-pink-orange-gray）が，表１の頻度順と似通う。

表１　色彩語のコーパス間頻度順位比較（内田富男2014から引用）

コーパス名	頻度１，２位	３位	４位～８位	９位	10，11位
CANCODE	black-white	red	blue-green-yellow-brown-grey	pink	purple-orange
North Amsp	white-black	red	blue-brown-green-yellow-gray	pink	orange-purple
LOB	white-black	red	green-blue-yellow-grey-brown	pink	purple-orange

次に，日本語の和語と外来語の色彩語の出現頻度をみる。話し言葉における色彩語の出現頻度は，『茶漉』の「名大会話コーパス」検索（コーパス総語数＝2327333）によると，次の通りである（形容詞・名詞とも含む。結合形も含む。比喩使用も含む）。

表２　『茶漉』「名大会話コーパス」における色彩語の出現度数

和語[4]	白74，赤59，黒49，緑36，青32，黄色12，茶色11，紫９，灰色０，桃色０，橙色０
外来語	ピンク50，ブルー41，ブラック11，グリーン７，ブラウン５，ホワイト４， オレンジ色４，パープル２，グレー２，レッド１，イエロー１

書き言葉における外来語の出現頻度についてはどうか。「NINJAL-LWP forBCCWJ」を用いて検索した単純な結果は次の通りである。

表３　「NINJAL-LWPforBCCWJ」による外来語色彩語の出現状況

ピンク2339　グリーン2325　ブルー2150　オレンジ1892　ホワイト1469 ブラック1384　レッド1098　グレー730　ブラウン456　イエロー383　パープル190

外来語色彩語の使用としてピンクが最も多く，グリーンとブルーがそれに次ぐのはほぼ確実とみられるが，表３の中には，色彩語でないもの（果物のオレンジや人名のグリーン，ブラウン，ホワイト，ブラック，レッド，

グレー等）も多数含まれており，区別して検索することができない。同様に「中納言」によって BCCWJ（現代日本語書き言葉均衡コーパス）を検索しても，色彩語から固有名詞を区別して取り出すことはできない。そこで BCCWJ の中の「新聞」サブコーパスにしぼり，「語彙素読み」で検索して，色彩に全く関わりが無いと思われる例（人名等）や英語表記を手作業で取り除き，次の結果を得た。音楽グループ名や映画名のような固有名詞でも，色の意味やイメージが残るものは含めた。

表４　BCCWJ「新聞」サブコーパスにおける外来語色彩語の出現度数

色彩語	グリーン	ピンク	ブルー	レッド＊	ホワイト＊	ブラック＊	オレンジ	イエロー＊	グレー	ブラウン＊	パープル＊
出現度数	38	31	26	24	22	21	10	10	7	3	1

（＊をつけた語については，全ての出現形が結合形であった。「グリーン」はゴルフ用語10を含む。「ピンク」はピンクレディー８を含む。「ブルー」はブルーハーツ６を含む。）

概して，「和語」色彩語の出現頻度の高いものは，「英語」の色彩語の出現頻度の高いものと似通っている，といっていいだろう。また，「和語」色彩語の中で出現頻度の高いものは，佐竹昭広（1955）が古代日本語の色彩語として挙げた４色「白・黒・赤・青」ともほぼ一致する。この４色は，柴田武（1988）が日本語の基本色名として挙げたものでもある。日本語の「白・黒・赤・青」は，英語の white・black・red・blue と同様，ほかの色彩語に比べて，基本的かつ重要な語であるため，使用頻度が高いのであろう。

一方，「外来語」色彩語の出現状況を見ると（色彩を表さない場合も含んだおおざっぱなものであるが），話し言葉ではピンクとブルー，書き言葉ではピンク・グリーン・ブルーが多く，頻度の点で「和語」とも「英語」

ともあまり一致しない。

色彩語が外来語として流入する要因については，単純化すると次の２通りの仮説が立てられる。

（ア）基本的な色彩語は和語でまかなえるので，外来語は入ってこない。基本的ではない色彩語において，外来語が入ってくる。

（イ）基本的な色彩語であっても，新鮮さを求めて外来語が取り入れられる。

ピンクの出現頻度が高いことは（ア）の妥当性を示すようにもみえるが，ブルーも多いことから，（ア）は全面的に当てはまるわけではなく，（イ）が当てはまる場合もあると考えられる。

色彩語が外来語として取り入れられた要因を知るためには，１つ１つの語について，取り入れられた時代により近いころの使用状況をみることが有効であろう。そのため，次章では『青空文庫』パッケージを用いて用例を検索し，観察することとした。

３.『青空文庫』パッケージを用いた検索

3.1 『青空文庫』パッケージと検索について

『青空文庫』パッケージ（『青空文庫』の12023作品（2014年10月１日時点のデータ）を全文検索システム『ひまわり』用にインポートしたもの）[5] を用いて検索した。初出年のわかるものは昭和20年代までに限った。

『青空文庫』パッケージを用いることには，次のような利点がある[6]。

・　明治から昭和にかけての文学作品が多数収められており，外来語とり入れの状況をみるのに役立つことが期待できる。

・　『青空文庫』は入力者と校正者が別個に存在し，歴史的仮名遣いや現在一般に使われていない漢字は一定基準によって処理され，入力結果

が信用に値すると思われる。

・　著者の生没年情報がある。

・　初出年情報が付与されている作品もある。

・　『ひまわり』によって大量のデータを迅速に検索・並べ替えできる。

「ピンク・グリーン・ブルー・グレー・ベージュ・ブラウン・レッド・イエロー・ホワイト・ブラック」[7] の用例をそれぞれ検索し，色彩に全く関わりが無いと思われる例（人名・地名等）を手作業で取り除いた。ただし，固有名詞でも色の意味やイメージが残るとおもわれるものは残した。次節から，これらの色彩語の用例を順にみていく。

3.2　ピンク

『青空文庫』パッケージに出現した「ピンク」延べ61件を全てあげたものが次の表５である。著者の生年順に並べている[8]。用例の中で［　］で示したのは本稿筆者による注である。以下の表においても同様。

「ピンク色」以外の結合形は，「サモンピンク」が１件あるだけである。「ピンク色」と「ピンク」の分布は，「～色」が表の上半分に多く，下に行くにつれて減るという傾向がある。概して，後の世代の著者は「ピンク色」でなく「ピンク」を使うといえよう。

形容の対象をみると，服や布製品（パフ，ハンカチ，カーテン）の色に使われた例が目立つが（26件），それ以外にも，照明や灰皿や壁などの人工物に加えて，花の色や空の色，山の雪，人間の身体（頬や耳たぶや広範囲の皮膚）などの自然物にも使われている。また「ピンク色の世界」「ピンク色ローマンス」のような抽象的な使い方もみられる。

表５　『青空文庫』パッケージにおける「ピンク」

著者名	著者生没年	用例
南方熊楠	1867-1941	石竹を仏語でアレ（小さい目），英語でピンクと呼ぶ
小島烏水	1873-1948	雪白色は，蒼空と映じていかにも微細で尖鋭な，ピンク色に変化
片山広子	1878-1957	赤でなくピンクいろぐらゐのびんばふ／このピンク色の世界／空のしらみ明けてゆく暁ごろのうすいピンク
高村光太郎	1883-1956	山桜がいいピンク色にぽうっと
下村湖人	1884-1955	ピンク色に染まったその頬
国枝史郎	1887-1943	耳髢はいつもピンク色
菊池寛	1888-1948	淡いピンク色のシュミーズ
夢野久作	1889-1936	ピンク色ローマンス
橘外男	1894-1959	白やピンク，乳白，紅，とりどりの花
水谷まさる（翻訳）	1894-1950	ピンクのドレス／ピンクの絹のを着ます
宮沢賢治	1896-1933	家の柱ものきもみんなピンクに／にせもののピンクの通信
海野十三（最後の１件は翻訳）	1897-1949	ピンク色のワン・ピース／このピンク色の物体／ピンク色の洋装／ピンク色の絹のハンカチーフ／ピンク色の裏のついた大きな口［ライオン］／ピンク色に光った鼻
宮本百合子	1899-1951	花の赤，白，ピンク，淡いクリームの色々／うすいピンクのクレープ／ピンクのスリップ／杏色がかったフランス独特のピンクの絹服／黄がかったピンクの軽い服／白地にほそいピンク縞丸形カラーのねまき
久生十蘭	1902-1957	ピンクに日灼けした半裸体の俘虜／薄いピンクの部屋着
三好十郎	1902-1958	ピンクのクレープデシン／薄いピンク色のクレプデシンのワンピース／ピンク色のワンピース
渡辺温	1902-1930	ピンク色のパフ
林芙美子	1903-1951	ピンクのブラウス／ピンクの，デシンのブラウス／薔薇の薄いピンクの花びら
小野佐世男	1905-1954	ピンク色のイヴニング
原民喜	1905-1951	ピンクのドレスを着た外国の娘
坂口安吾	1906-1955	白やピンクのけばけばしい壁／小さなピンク色の灰皿／ピンクの小さな灰皿
太宰 治	1909-1948	ピンクの裾の長い，衿の大きく開いた着物／ピンクが一つ［薔薇］／夕靄は，ピンク色／靄がこんなに，やわらかいピンク色／ピンクの靄／ピンクの光／ピンクのドレス
織田作之助	1913-1947	繋ぎ提灯の，ピンク，ブルウ，レモンエローの灯り／提灯のピンクの灯り／ピンクの電飾文字／電飾文字の灯りが，ピンク，ブルー，レモンイエローの三色／提灯の色はやはりピンク，ブルー，レモンイエローの三色／円いピンク・ブルウ・レモンイエローの提灯の灯り／純白のドレスの胸にピンクの薔薇
久坂葉子	1931-1952	ピンクのカーテン／カーテンはピンク／ピンクのひらひらのついた洋服／そのピンクの年／ピンクやブルーの封筒／サモンピンクのスカート

3.3　グリーン

『青空文庫』パッケージに出現した「グリーン」類，延べ38件をあげたものが次の表 6-1 と表 6-2 である。表記（「グリン」「グリイン」と「グリーン」）で表を２つに分けた。

表 6-1 『青空文庫』パッケージにおける「グリン」「グリイン」

著者名	著者生没年	初出年	用例
島崎藤村	1872-1943		同じグリンでもどうかして，宜い色を ［本の表紙の色］
与謝野晶子	1878-1942	1914（大正３）	テレピン油で拭いた後のグリインの浸染んだ掌 ［絵の具の色］
林芙美子	1903-1951	1948（昭和23）	黒つぽいグリンのズボン
			山肌は白と黄とエメラルドグリンの苔で
堀辰雄	1904-1953	1938（昭和13）	グリイン・ゲエブルスといふ，緑の切妻のある，
		1939（昭和14）	ブルウやグリインの目立つた，（略）瀟洒な衣裳
太宰治	1909-1948	1939（昭和14）	一望の麦畑，麦は五，六寸ほどに伸びて，やわらかい緑色が溶けるように，これはエメラルドグリンというやつだな，と

「グリーン色」の形が３件あった。昭和10・12・14年の出現である。外来語としてとり入れた初期の頃に，「色」の後接する形とそうでない単独形が併存したようにみえる。

複合語形の中に，エメラルドグリーン，ダークグリーン，ライトグリーンといった複合語が色彩語となっているものがある。殊にエメラルドグリーンの数が目立つ。

形容する対象は，服や布類（リボン，タァヴァン，テーブルクロス，カーテン）が多いが，そのほかに，人工物としては紙や煙草の箱や花瓶などがあり，本の表紙の色を選ぶ文脈や絵の具の色のような，着色剤を示すものもある。自然物としては，苔や麦や草，川の水の色（板倉勝宣の例），景色全体を形容するものなどがある。

「エメラルド・グリーンのペルノー」や「スペイン風のグリーンの花瓶」

表 6-2 『青空文庫』パッケージにおける「グリーン」

著者名	著者生没年	初出年	用例
岡本綺堂	1872-1939	1927（昭和２）	グリーン・フラグ［書籍名］
寺田寅彦	1878-1935	1935（昭和10）	グリーンホテル２件
野村胡堂	1882-1963		目のさめるようなエメラルド・グリーンの実物
楠山正雄	1884-1950		グリーン（緑）というイギリス語
岡本かの子	1889-1939		エメラルド・グリーンのペルノー
杉田久女	1890-1946	1932（昭和７）	明るいグリーンの草
岸田国士	1890-1954	1927（昭和２）	こつちのグリーンの方
牧野信一	1896-1936	1922（大正11）	グリーンと赤とを幾分か強めて
海野十三	1897-1949	1934（昭和９）	青々としたグリーンを眺められる休憩室
		1935（昭和10）	鼠がかったグリーン色に塗りつぶされて
		1935（昭和10）	スペイン風のグリーンの花瓶
		1936（昭和11）	濃いグリーンの長いオーヴァ
		1947（昭22）	薄いグリーンの格子織のオーバー
		1947（昭22）-1949	グリーンの背広服
板倉勝宣	1898-1923		グリーンから底に行くほど，藍色に変って
宮本百合子	1899-1951	1937（昭和12）	グリーン色の縞のスカート
		1940（昭和15）	黄色とグリーンの縞のオイル・クローズ
		1944（昭和19）	目がまわるようなグリーンのブラウズ
		1947（昭和22）	エメラルド・グリーンに輝いたフランスの絵の樹木
		1947（昭和22）-1950	グリーンのリボン／うすいグリーンの用紙／パジャマも，うすいクリーム色にグリーン縞の
小熊秀雄	1901-1940	1939（昭和14）	グリーン色の地厚のカーテン
久生十蘭	1902-1957		グリーンのタァヴァン
古川緑波	1903-1961	1937（昭和12）	ダークグリーンの，落ち着いた色／ネクタイ，ツータルの黒がゝったグリーン
古川緑波	1903-1961		グリーン・ティー２
小野佐世男	1905-1954		あちらの岡，こちらの山肌とまるでグリーンに白
蘭郁二郎	1913-1944	1935（昭和10）	あのライトグリーンのタイルに

や「エメラルド・グリーンに輝いたフランスの絵の樹木」などの例を見ると，事物が洋物であるために，それを形容する色彩語も外来語が使われているようにも見えるが，全く異なる例として野村胡堂の使い方があり，「昔の武士の旅合羽」という和風の品物について「エメラルド・グリーン」の語で形容している。

3.4　ブルー

『青空文庫』パッケージに出現した「ブルー」類，延べ56件を並べたものが次の表７である。ブルー類には，「ブリュー」「ブリュウ」「ブリュ」

表７　『青空文庫』パッケージにおけるブルー類

著者名	著者生没年	用例
夏目漱石	1867-1916	ブリュー・ブラック［インク］
内田魯庵	1868-1929	ブリウブラク［インキ］3
国木田独歩	1871-1908	プルシャンブリュー［絵の具］
岡本綺堂	1872-1939	ブリュー・ベル
小島烏水	1873-1948	プルシアンブルーが，谷一面の天を染めて
寺田寅彦	1878-1935	三黄は睨み朱は吼える，プルシアンブルーはうめく
片山広子	1878-1957	「ブリュ・クラウド」つまり「青い雲」といふ名［猫］
長谷川時雨	1879-1941	ブルー・パイ［鳥］／ブリュー・ストッキング
愛知敬一	1880-1923	絵具のプルシァン・ブリュー
北原白秋	1885-1942	ブリュウブラックの潮の面／ブリュブラック　2
国枝史郎	1887-1943	「ブリュー・バード」などというダンスホール
夢野久作	1889-1936	青空はブルーブラツク
宮沢賢治	1896-1933	メチレンブリュー／ブリューベル
牧野信一	1896-1936	ライト・ブルウの封筒／ブリウ・リボン［女性の綽名］2
板倉勝宣	1898-1923	プロシァンブルーの空
横光利一	1898-1947	ネビイブリュウの服色
宮本百合子	1899-1951	はっきりとしたブリュー［インク］／松屋のダーク・ブルー［原稿用紙の枠］／ダークブルーの天地／濃いブルー［刺繍］／ブルーブラックのインク
伊丹万作	1900-1946	ブルー・バード映画
三好十郎	1902-1958	セルリアン・ブルー／ブルー・ド・プルッス／ネーヴィ・ブルーのダブダブのズボン／ブルー・ストッキング／ブルウ・ブルッス
林芙美子	1903-1951	赤とブルウの大名縞［人絹のタフタ］
堀辰雄	1904-1953	ブルウやグリインの［瀟洒な衣装］
小野佐世男	1905-1954	ブルーバード映画　4
太宰 治	1909-1948	ことし流行とやらのオリンピックブルウのドレス／コバルトブルウの糸を足して，セエタに／イギリスのブルウストッキング
織田作之助	1913-1947	電飾文字の灯りが，ピンク，ブルー，レモンイエローの三色／提灯の色はやはりピンク，ブルー，レモンイエローの三色／繋ぎ提灯の，ピンク，ブルウ，レモンエローの灯り／円いピンク・ブルウ・レモンイエローの提灯の灯り／ブルウスカイ（青空）というコッテエジ風の喫茶店兼料理店／ブルウスカイ　5
久坂葉子	1931-1952	ピンクやブルーの封筒／ブルーの長いドレス

「ブリウ」「ブルウ」「ブルー」が含まれている。

単独形で使われているケースは少なく，56件中の10件のみである。この表で生年順に並べた25人の作家のうち，はじめの16人は複合形のみの出現であり，宮本百合子以後の５人（宮本百合子，林芙美子，堀辰雄，織田作之助，久坂葉子）が単独形の「ブルー」類を使用している。単独形の場合の形容対象を見ると，衣服や刺繍，封筒，照明などの人工物ばかりであり，自然物の例は見当たらない。

複合形の異なり数18のうち，半数の９が色彩語である（ブルーブラック，プルシアンブルー，メチレンブルー，ライトブルー，ネビーブルー，ダークブルー，セルリアンブルー，オリンピックブルー，コバルトブルー）。

「ブルー」のほかに，「ブリュー」「ブリュウ」「ブリュ」「ブリウ」「ブルウ」の異形態が見られる。なかなか表記形が定まらなかったものと見られる。

3.5　グレー

『青空文庫』パッケージに出現した「グレー」類をまとめたものが次の表８である。

初期の２件，すなわち与謝野寛の「グレエの森」（大正４）は詩におけることばであり，有島武郎の「プァーリッシ・グレーの胡麻」は戯曲における登場人物（若い男性画家）のことばとして出現する。つまり自然物の形容であるが，いずれも芸術的感興のためにあえて新奇な表現が使われた可能性が高いといえよう。

その後の６件（昭和15～30）は色の説明が１つある以外は，全て服の色，すなわち人工物の色を表示している。

結合形は「プァーリッシ・グレー」「シルバーグレイ」の２件であるが，いずれも結合形自体が色彩語である。

表８　『青空文庫』パッケージにおける「グレー」類

著者名	著者生没年	作品と初出年	用例
与謝野寛	1873-1935	「梅原良三郎氏のモンマルトルの画室」1915（大４）	グレエの森，石橋，其等の風景と，赤い菊，赤い芍薬，
有島武郎	1878-1923	「ドモ又の死」1922（大11）	あのヴェラスケスが用いたというプァーリッシ・グレーの胡麻
宮本百合子	1899-1951	「獄中への手紙07」1940（昭15）	柔かにグレーの色と薄いタイシャっぽい色，緑に白地［本の表紙の絵の色］
久生十蘭	1902-1957	「復活祭」？年	グレイのジャケット
		「あなたも私も」1954・1955（昭29・30）	グレーのジャンパー・スカートに，緋裏のついたアンサンブルのコートを／グレーのジャケット
小野佐世男	1905-1954	「ストリップ修学旅行」？年	それに洋服の好みも黒やグレーでまるで渋好みじゃないか
坂口安吾	1906-1955	「安吾人生案内03」1951（昭和26）	シルバーグレイのレインコートを着た色白の身なりのいい青年

（有島の「プァーリッシ・グレー」は pearlish gray か。）

3.6　ベージュ

『青空文庫』パッケージに出現した「ベージュ」類をまとめたものが次の表９である。

表９　『青空文庫』パッケージにおける「ベージュ」類

著者名	著者の生没年	作品と初出年	用例
宮本百合子	1899-1951	「雑沓」（1937）	ベージュ色に細い赤線をあしらった地味なスウェータア／ベージュ色のスウェータア
		「道標」（1947-1949）	ベージュの絹服／ベージ色のスウェター

４件しか無いが，すべて洋服の色を形容している。

４件ともが宮本百合子によるものである。宮本百合子は，ベージュだけでなく，ピンク・グリーン・ブルー・グレー・レッドの検索結果にも現れる。『青空文庫』に宮本百合子作品が多く収められている（1169作品，ただし短いものも多い）ことによって検索結果が多く出るのだとも考えられるが，おそらく，宮本百合子は色彩に深い関心があり，好んで外来語の色

彩語を使用していたのではないかとも思われる[9)]。

3.7　ブラウン

『青空文庫』パッケージに出現した「ブラウン」延べ24件を表10にまとめた。

表10 『青空文庫』パッケージにおける「ブラウン」

著者名	著者の生没年	作品と初出年	出現形
村井弦斎	1863-1927	「食道楽」 1903（明36）	ブラウンソース　19件 ブラウンライススープ　3件
古川緑波	1903-1961	「古川ロッパ昭和日記」 1934（昭９）	ブラウン・ソース　1件
高祖保	1910-1945	「雪」1942（昭和17）	ブラウン［自分の身体の色］

１件を除いた残りの23件は複合語形であり，そのうち20件がブラウンソースもしくはブラウン・ソース，３件がブラウンライススープである。「ブラウン」は，外来語として入ってきた当初は，料理に詳しい人々に使われる複合語の一部であったという可能性がありそうだ。

単独形１件（高祖保の詩「雪」）の例を下記に引用する。

> 一風呂浴びる。すると，どうだ。現像液に涵した乾板のやうに，わたしの生地の部分が，みるみる泛びあがつてきた。ブラウンと白とで出来あがつた，だんだらの斑。この半白の「肉体写真」のうへで，一日の太陽の歩みを，―仮借なく灼きつける，その炎の歌を，まざまざと読みとることができる。（下線は本稿筆者）

単独形で，人間の体という，自然物の色を描写している。さきに「グレー」の自然物の形容で見た例と同様，芸術的感興のための新奇な表現であるとみてよいだろう。

3.8　レッド

『青空文庫』パッケージに出現した「レッド」延べ22件を，次の表11にまとめた。

表11　『青空文庫』パッケージにおける「レッド」

著者名	著者生没年	用例
岡本綺堂	1872-1939	レッド・ホース・ホテルという宿屋
小島烏水	1873-1948	「レッド・ブラッフ」の赭ら岩
楠山正雄（翻訳）	1884-1950	レッド・ライオン・コート　3
岸田国士	1890-1954	紅海にさしかかります。レッド・シイと申しまして
宮沢賢治	1896-1933	すっきりとしたコチニールレッド／レッドチェリイ／レッドチェリー
宮本百合子	1899-1951	レッドパージ／レッド・パージ　5／レッド・デリシャス［りんご］／いわゆるレッド・マーク
久生十蘭	1902-1957	レッドトップ［馬の名］
小野佐世男	1905-1954	「レッド・ランタン」［映画名］
吉行エイスケ	1906-1940	レッド・バンド［煙草名］
坂口安吾	1906-1955	レッド・パージ
太宰 治	1909-1948	レッド・テエプ［＝形式主義的］

レッドはすべてが結合形である。異なり13のうち，固有名詞らしきものが８を占める。延べ数で多いのはレッドパージの類で，７件ある。

「コチニールレッド」は結合形自体が色彩語となっている。

3.9　イエロー

『青空文庫』パッケージに出現した「イエロー」類を表12にまとめた。

表12　『青空文庫』パッケージにおける「イエロー」類

著者名	著者の生没年	作品と初出年	出現形	被修飾物
有島武郎	1878-1923	「ドモ又の死」1922（大11）	ネープルスエロー	きなこ
織田作之助	1913-1947	「それでも私は行く」1946（昭21）	レモンイエロー　3	電飾文字，提灯
		「土曜夫人」1946（昭21）	レモンエロー	提灯

延べ数５で，すべて色を表す複合語である[10)]。

有島武郎の例は，「グレー」のところでみた，「プァーリッシ・グレーの胡麻」と同じ戯曲における同じ登場人物（若い男性画家）の同じセリフの中にあるものであり，「ラーヴェンダー色のあんこと，ネープルス・エローのきなこ・・」という表現で，空腹状態の登場人物が食べ物についての妄想を繰り広げる箇所である。

3.10　ブラックおよびホワイト

「ブラック」と「ホワイト」については，表を省略し，説明のみ行う。

ブラックは，延べ55件あり，そのうち「ブラック」51，「ブラク」４であった。全て，結合形である。多く見られたのは「ブラックアンドホワイト」「ブルーブラック」「ブラックリスト」等である。

ホワイトは，延べ73件あり，そのうちの67件が結合形，６件が単独形であった。多く見られたのは「ホワイトシャツ」20件である。

ホワイトの単独形６件の例を次に列挙し，指し示す内容を検討する。（下線は本稿筆者による）

(a) ここの陽気はもう大分暑かった。小野田はホワイト一枚になって寝転んでいたが，　（「あらくれ」1915 徳田秋声［1872-1943］）

(b) 「とうさん―ホワイトを一本と，テラ・ロオザを一本買ってくれない？絵の具が足りなくなった。」こう切り出した。

（「嵐」1926 島崎藤村［1872-1943］）

(c) その客車が二つの仕切りに区分されていて，広い方の入口には「ホワイト」，狭い方には「カラード」という表札が打ってある。自分は少し考え込んだが，どう考えてもホワイトではないからと思ってカラードの方に這入った，

（「チューインガム」1932 寺田寅彦［1878-1935］）

(d) 絵具のホワイトもないのよ。

（「獄中への手紙」1942 宮本百合子［1899-1951］）

(e) 絵は梅の絵で，右肩に『唐詩選』の句が賛にはいつている。それがちようどお太鼓の所一ぱいに出る。地は黒じゆすで顔料は油絵具のホワイトを少しクリーム色に殺して使い，筆は細い日本筆を用いた。

（「わが妻の記」1946 伊丹万作［1900-1946］）

(a) の「ホワイト」は，「ホワイトシャツ」の省略形であり[11]，(b) (d) (e) は絵の具の色の名前である。(c) は著者がアメリカ旅行中に見た英語の white（ここでは白色人種をさす）をカタカナで写し取った表現である。つまり６件とも事物の名前であって，色の描写に使われたものではない。

４．10種の外来語色彩語について

4.1　10種の外来語色彩語の出現状況と分類

以上，３章では外来語の色彩語１つずつについて観察した。それらを，結合形か単独形かに注目して，出現数をまとめたのが次の表13である。おおよそ，単独形が多いものの順になるように並べている。なお，「～色」の形はほかの結合形と異なり，単独形に近いものと考えて，ここでは備考欄にその数を載せた上で単独形としてカウントしている。

表13から，外来語の色彩語を，まずは３つに分けて考えることができる。

（１）単独形の使用があり，結合形はほとんどないもの　…ピンク，ベージュ
（２）単独形の使用があり，結合形もあるもの　…グリーン，グレー，ブルー
（３）結合形の使用が多く，単独形での使用がほとんど無いもの
…ブラウン，レッド，イエロー，ホワイト，ブラック

表13 『青空文庫』パッケージにおける外来語色彩語の出現数

	(a) 単独形・結合形の合計（延べ数）	(b) 単独形（延べ数）	(c) 結合形（延べ数）	(d) 結合形（異なり数）	備考
ピンク	61	60	1	1	単独形60のうち21が「ピンク色」
グリーン類	38	25	13	7	単独形25のうち３が「グリーン色」
ブルー類	56	10	46	18	結合形18のうち９は色彩語
グレー類	8	6	2	2	
ベージュ類	4	4	0	0	単独形４のうち３が「ベージュ色」の類
ブラウン	24	1	23	2	「ブラウンソース」19
レッド	22	0	22	13	結合形のうち約半数が固有名詞
イエロー類	5	0	5	2	
ホワイト	73	6	67	16	結合形の延べ67のうち20が「ホワイトシャツ」
ブラック類	55	0	55	20	

＊異なり数においては，同一語をさす異形態と思われるものは１つと数えた。すなわち，中黒の有無（例：「レッドパージ」と「レッド・パージ」）や長音表記の違い（例：「レッドチェリー」と「レッドチェリイ」）などは，異なり数においては同じものとしてまとめている。

＊グリーン類は「グリン」「グリイン」「グリーン」，ブルー類は，「ブルー」「ブルウ」「ブリュー」「ブリュウ」「ブリュ」「ブリウ」，グレー類は「グレエ」「グレイ」「グレー」，ベージュ類は「ベージ」「ベージュ」，イエロー類は「エロー」「イエロー」，ブラック類は「ブラック」「ブラク」である[12)]。

（１）の「ピンク」と「ベージュ」は，「～色」の形を除けば，結合形がほとんど無い。取り入れられた初期の頃から，「～色」もしくは単独形で，事物の色彩を描写する語として機能していたようだ。どちらも初期には「～色」の形が多く使用されていたようである。

（２）の中でも「グリーン」は，初期から単独形があり，ピンクやベージュと同様に機能していたとみてよさそうである。「グリーン色」の形も少数ながらみられた。

「グレー」は出現数はごく少ないが，初期の頃から単独で色彩語として

使われている。ただし，「色」が後接する例は見当たらなかった。

「ブルー」は，ある時期（宮本百合子・林芙美子・堀辰雄らが単独形を使う頃）までは結合形しか出てこないが，単独形の出現以降はそれで事物の色を描写する例が特殊なものとはみえない。

（３）の「ブラウン・レッド・イエロー・ホワイト・ブラック」については，日本語の中に外来語として出現しはじめた頃から昭和初期にいたるまで，単独形の色彩語として，事物の色を描写するという使用は，ほぼゼロといってよいだろう。今回のデータではわずかに，「ブラウン」が詩において１例，あったのみである。「ホワイト」の６例は，省略語１，着色剤（絵の具）の色を指すもの３，カタカナによる英語の写し取り２，であり，「ホワイト」が事物の色彩を描写する文脈で用いられた例はなかった。表４で示したBCCWJ「新聞」サブコーパスにおける外来語色彩語においても，「ブラウン・レッド・イエロー・ホワイト・ブラック（・パープル)」は，結合形のみであり，単独で色彩を描写する語としては用いられていなかった。以上のことから，「ブラウン・レッド・イエロー・ホワイト・ブラック」は，単独で事物の色彩を描写する語としては，明治から現在に至るまで，ほぼ取り入れられていないとみてもよいだろう。

以上検討した結果から，上記の外来語の色彩語は，３つに分けるのではなく，「ピンク・ベージュ・グリーン・ブルー・グレー」と「ブラウン・レッド・イエロー・ホワイト・ブラック」に，大きく二分するのが適当かと思われる。

4.2　外来語色彩語の２分類とその性質

前節の最後で，「ピンク・ベージュ・グリーン・グレー・ブルー」と「ブラウン・レッド・イエロー・ホワイト・ブラック」が，後者が結合用法のみで単独用法が無いという点で，二分できると述べた。ここで，それ

ぞれの語の，文におけるはたらきをみてみよう。

たとえば，次の例文はいずれも可能である（作例）。

- ピンク/ベージュ/グリーン/ブルー/グレー　の服を着たひとがいる。
- 図表の，ピンク/ベージュ/グリーン/ブルー/グレー　の部分を見てください。
- 壁を，ピンク/ベージュ/グリーン/ブルー/グレー　に塗った。

しかし，次の例文は，いずれもやや不自然に感じられる[13]。

- ＊ホワイト/＊ブラック/＊レッド/＊イエロー/？ブラウン　の服を着たひとがいる。
- 図表の，＊ホワイト/＊ブラック/＊レッド/＊イエロー/？ブラウン　の部分を見てください。
- 壁を，＊ホワイト/＊ブラック/＊レッド/＊イエロー/？ブラウン　に塗った。

上記の例のように，「ホワイト・ブラック・レッド・イエロー・ブラウン」は，「～の〈事物〉」や「～に〈塗る，変わる，等〉」における「～」の位置に挿入しにくい[14]。

しかし，「ホワイト・ブラウン・ブラック・レッド・イエロー」が，現代日本語において，単独で色彩語として使うことが全く不可能，という訳ではない。これらのすべてが，単独で色彩語として使える特別な文脈がある。それは，カタログ等に現れる色彩語列挙の文脈における使用で，沢田奈保子（1992）のいう「マルチプル・チョイス」の「指定」の文脈である[15]。たとえば，BCCWJ の中にも，次のような例がある。

- さりげなさがオシャレなショートスリーブＴシャツ。サイドにポケット付き！　カラーはホワイト，ブラックの２色。

（雑誌『SURFIN’ LIFE』マリン企画2004年11月号）

- 階段は曲線で奥行を出し，ビー玉で，上から赤の花の色のレッド，イエロー，

グリーン，ブルーと下に流れるように埋め込みました。

（書籍『エクステリア＆ガーデン』ブティック社 2005）

これらの例を見ても分かるように，この「マルチプル・チョイスにおける指定」の文脈においては，「ホワイト・ブラウン・ブラック・レッド・イエロー」だけでなく，「ピンク・ベージュ・グリーン・ブルー・グレー」も使用可能である。

つまり，外来語の色彩語は，機能面からみて，次の２種類に分けられるのである。

・　マルチプル・チョイスの文脈における「指定性」と，ものの属性を記述する「描写性」の，両方を持つもの
・　マルチプル・チョイスの文脈における「指定性」のみ持っていて，「描写性」を持たないもの

５．まとめ

色彩語というジャンルにおいて，外来語がどのように入り込んでいるかについて，『青空文庫』パッケージを検索し，考察した。今回調べた10種の外来語色彩語について，ここまで述べてきたことを表14にまとめる。

表14　外来語色彩語の性質

	ピンク	グリーン	ベージュ	ブルー	グレー	ブラウン	ホワイト ブラック レッド イエロー
マルチプル・チョイスの文脈で色を「指定」する	○	○	○	○	○	○	○
色彩を「描写」する	○	○	○	○	○	(△)	×
「～色」の形がある	○	△	○	×	×	×	——
自然物の色彩についての描写がある	○	○	×	×	(△)	(△)	——
結合形の出現が少ない（「～色」を除く）	○	×	(○)	×	(△)	×	×

（出現数がごく少ないものはカッコに入れた）

表14をみると，「色彩を描写する」「「～色」の形がある」「自然物の色彩についての描写がある」「結合形の出現の割合が少ない」の４つの項目は，色彩語外来語の，日本語へのなじみ度の深さを表しているのではないかと思われる。「ピンク」と「グリーン」が，外来語の色彩語の中では，日本語としてこなれたものであり，それに次ぐのが，「ベージュ・ブルー・グレー」とみてよいだろう[16]。

２章で，色彩語と外来語流入との関係について，下記の２つの仮説を挙げた。

（ア）基本的な色彩語は和語でまかなえるので，外来語は入ってこない。基本的ではない色彩語において，外来語が入ってくる。

（イ）基本的な色彩語であっても，新鮮さを求めて外来語が取り入れられる。

日本語の基本的な色彩語は「白・黒・赤・青」であるとすると，ピンクおよびグリーンに当たる和語（桃色，緑色）は基本語ではないので，外来語が入りやすい余地があったというふうに考えられ，（ア）の仮説が妥当性を持つと言えることになる。ベージュとグレーについても，それにあたる非外来語の「薄茶色」や「灰色」は基本色ではなく，（ア）が当てはまる[17]。ここで問題となるのは，ブルーである。

ブルーは，表13からも分かる通り，「描写性」を持つ外来語の色彩語の中では，単独形で使われている割合がもっとも少ない。また今回のデータの範囲内では，自然物の色の描写が無い。これらの現象は，外来語「ブルー」に対応する和語「青」が，日本語の色彩語として基本的かつ重要な４語に入っていることと関わりがあるのではないだろうか。すなわち，「青」が確固として存在するゆえに，「ブルー」の取り入れが遅れたのではないか。そして，遅れはしたものの結局のところ取り入れられたのは，青に近いさまざまな微妙な色合いを表す多くの結合形の色彩語（すなわちブルーブラッ

ク，プルシアンブルー，メチレンブルー，ライトブルー，ネビーブルー，ダークブルー，セルリアンブルー，オリンピックブルー，コバルトブルー等）が先行して取り入れられており[18]，そこから単独形「ブルー」が析出されたのではないか。「ブルー」については，「ブルー」「ブルウ」「ブリュー」「ブリュウ」「ブリュ」「ブリウ」と表記形が６つもあり，なかなか１つに定まらなかったことも，安定した取り入れを妨げた要因であるかもしれない。すなわち，「ブルー」の取り入れの状況を特殊であるとみれば，仮説（ア）は概ね妥当性を有すると考えられる。

以上，色彩語という分野において，外来語の取り入れの様相がどのようであったかに注目し，『青空文庫』パッケージのデータをもとに述べてきた。今後の課題としては，まず，外来語の色彩語が取り入れられた時期の文学作品をさらに詳しくしらべることが挙げられる。翻訳作品と非翻訳作品との比較や，著者が外国語に堪能かどうか，などの観点も注目すべきであろう。従来，文学作品における色彩語の分析は，文学研究の一環，特に作家論の中で位置づけられてきたように思われる。言語学の視点から，日本語の文学作品における色彩語の分析を行なった研究は少ないようである。また，色彩語とそれが描写する事物との関係について，言語学的な立場から分析した論考としては，沢田（1992）のほかに藤村（2003）や木下（2005）などがあるが，外来語の色彩語を主な分析対象とした研究はほとんど見当たらなかった。今後，個々の色彩語における外来語と和語のペアについての調査も進めていきたい。

謝辞　本稿は，桃山学院大学2014年度「特別研修国内Ａ」の期間に，大阪大学文学研究科の「現代日本語学演習」（2014年度後期，石井正彦教授担当）において発表させていただいた内容に，加筆・修正を施したものである。発表機会を与えてくださり，貴重な助言・教示をくださった石井教授，および演習参加

者の皆さまに感謝申し上げる。

注

1)『コンサイスカタカナ語辞典 第4版』による。

2) 色の描写ではない用法（メタファー表現など）においては，言い換え不可能な場合もある。たとえばゴルフ場における「グリーン」は，「緑」や「緑色」で言い換えることはできない。

3) 村中（2015）では「グレー」と「灰色」について比較検討し，「被修飾語の指し示す事物の人工性」という点で，外来語「グレー」は有標だが，和語「灰色」は無標であると解釈している。すなわち，色彩語は抽象的な概念を表すものとして具体物に即さずに存在するのではなく，それが修飾する事物の性質と関係があることが示唆される。

4)「茶色」の「ちゃ」は字音語であり，「ちゃいろ」は混種語である。が，外来語（洋語）ではなく，かつ，表わされる色彩が重なる和語「鳶色」よりも使用頻度がずっと高く，使用範囲も広いと思われることから，ここでは「茶色」を外来語「ブラウン」に対応する「和語」相当のものとして扱っておく（BCCWJ「少納言」検索によれば，「茶色」1391件，「鳶色」11件，「とび色」6件，「トビ色」1件）。

5)『青空文庫』パッケージは，国立国語研究所の山口昌也氏により作成されたものである。なお，2015年4月2日現在で『青空文庫』パッケージの対象作品数は12279に更新されている。本稿で用いたデータはそれよりも1段階前のバージョンで，対象作品数は12023である。

6)『青空文庫』パッケージに関する問題点としては，次のようなことがあげられる。

(a) 初出年情報の付与されていない作品が相当数ある。

(b)「ルビ，注記などの付与情報についても，基本的には改変を加えていませんが，『ひまわり』用のデータ形式の関係上，反映できなかった情報（例：head 要素中の書誌情報）もあります。」とのことであるが，ルビが反映されていないものもある（たとえば夏目漱石「カーライル博物館」の中の「瓦斯」「倫敦」「面型」「洋琴」「天幕」のそれぞれのルビ，「ガス」「ロンドン」「マスク」「ピアノ」「テント」は，パッケージ中のデータには反映されていない）。

（c）『青空文庫』にはそれぞれの著者の代表的作品が必ず網羅されていると期待できるわけではない（たとえば，坪内逍遥については５作品が収録されており，15作品が作業中とのことであるが，シェークスピアの翻訳がほとんどを占め，「当世書生気質」は含まれていない）。

（d）文学的に価値の高いとされる作品も多いが，むしろ大衆小説（ミステリーや怪奇小説等）が多いという傾向がみえる。（人々のことばの一般的使用への，社会的影響を調べるという点では，大衆小説が多いことをメリットととらえることも可能だが，人々にどの程度の影響を与え得たものか定かではない。）

7）Berlin & Kay の11色からパープルとオレンジを外し，ベージュを入れた。パープルは表３・表４で頻度が低かったため，オレンジは果物の例がたいへん多く，色名だけ取り出すのが困難と思われたため，それぞれ外した。

8）表５から表12まで，用例は全て著者の生年順に並べている。作品の刊行年順に並べることも考えられようが，同一筆者が同じ色彩語（異形態も含む）を複数の作品で使う場合があり，同一筆者における変化の有無を見るためにも，筆者ごとの生年順がよいかと考えた。

9）今回扱った資料の中で，ブラウン，ブルー，ピンク，レッド，グリーン，グレー，イエロー，ベージュの８種のうち最も多くの色彩語を使っていたのが宮本百合子（６種），次が小野佐世男（５種），その次が久生十蘭と太宰治（４種）である。宮本百合子が色彩に深い関心を持っていたとすれば，外来語に限らず，和語・漢語の色彩語を多用していた可能性もある。また，宮本百合子は20歳頃にアメリカ滞在経験があるが，そのことと，外来語の色彩語を使うこととに関係があるかどうかは明らかでない。他の著者も含めて，欧米語圏の滞在経験の有無といった観点から改めて分析する必要があろう。

10）ほかに「イエロウ・ブック」が２件あり，２件とも堀辰雄［1904-1953］，出現は1933（昭和８）であったが，雑誌名で，色の意味合いがほぼ無いと思われたため，表には含めていない。

11）この徳田秋声の例は『精選版日本国語大辞典』の「ホワイト」の項に載っており，この意味における初出例と見られる。

12）「ホワイト」の異形態として「ワイ」なども考えられるが今回は扱っていない。「ピンク」「ブラウン」「レッド」については異形態を見い出していな

い。

13）ブラウンは，ホワイト・ブラック・レッド・イエローに比べるとやや許容されそうな感もあるため，？をつけた。

14）「ホワイト・ブラック・レッド・イエロー・ブラウン」においても，「～の〈事物〉」や「～に〈塗る，変わる，等〉」が許容されやすい場合がある。たとえば「髪をブラウンに染める」「ピンクに少しイエローの入った口紅」のように「着色剤」の色を表す場合は，許容度が上がりそうである。しかし詳細は別稿にゆずり，本稿ではやや単純化した議論にとどめる。

15）沢田（1992）では，「指定」を「あるセットの中から特定のものを選び出し，指し示すこと。」と定義づけており，「端的に言えば，二者択一の「どっち？／どっちの？」，マルチプル・チョイスの「どれ？／どの？」という疑問詞によって引き出される回答が「指定」である」としている。沢田論文は，日本語において基本色を表す色彩語が名詞と形容詞に分化している点に注目し，その使い分け要因を明らかにすることを目的としていた。基本色以外の，名詞しか持たない色彩語の場合は，役割分担ができないため，色彩の描写は名詞を用いて行なわれるとしている。いっぽう，本稿で扱っている外来語の色彩語は，すべて名詞であり，その点で言えば色彩の描写を全て行なえてもよいはずであるが，実際には日本語としてこなれていない外来語色彩語があり，それらは「指定性」のみを持つ。すなわち，日本語としてのなじみ度・こなれ度をはかるマーカーとして，「指定性」「描写性」の区別を用いることができるというのが本稿の主張である。

16）澤田田津子（1993）は，日本語教育のための基本外来語（中級レベル）を整理し，263語をリストアップしている。その中にみえる色彩語は「グリーン」「ピンク」の２語だけである。本稿の議論の結果からしても，「グリーン」「ピンク」が基本外来語とされるのは妥当と言える。

17）ピンクとグレーが日本語に取り入れられた理由としては，それぞれに対応する和語「桃色」「灰色」が「桃」「灰」といった事物への連想を伴う，すなわち，「桃色」「灰色」においては，ソシュールの「相対的有縁化」がはたらいているのにくらべて，「ピンク」「グレー」という音連続からは特定の事物への連想がされにくく，そのためにさまざまな事物の色の描写に使うのに便利だったから，ということもあるのではないかと推測される。（ピンクは英

語ではもともとナデシコ科ナデシコ属の植物をさすが，日本語においてはそのような連想はほとんど働かないであろう。）

18）外来語の色彩語を取り入れる以前に，「鉄紺・藍・納戸色・浅葱・水浅葱・露草色」などの語があり，日本文化において青系統のさまざまな色あいを表現しわけていたことが「～ブルー」という結合形の外来語色彩語を受け入れる素地になったかもしれない。

調査データ

『青空文庫』パッケージ（20141001）の『ひまわり』ver. 1.5 による検索（国立国語研究所　山口昌也氏作成）

BCCWJ（現代日本語書き言葉均衡コーパス）

「NINJAL-LWPforBCCWJ」　http://nlb.ninjal.ac.jp

BCCWJ「中納言」検索　https://chunagon.ninjal.ac.jp/search

（新聞サブコーパスは1473サンプル約64億文字。ただしこれは BCCWJ-DVD 版の数字。）

BCCWJ「少納言」検索　http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/

『茶漉』日本語用例・コロケーション抽出システム（一般公開版）http://tell.cla.purdue.edu/chakoshi/public.html

参　考　文　献

内田富男（2014）「コーパスと英語教育語彙表における基本色彩語の考察―NC, JEFLL Corpus，CEFR(-J) を用いて―」『明星大学研究紀要―人文学部』50

木下りか（2005）「色彩を表す名詞の連体修飾用法：「赤の N」と「赤い N」」『大手前大学人文科学部論集』6

金愛蘭（2012）「外来語の基本語化」『外来語研究の新展開』おうふう

佐竹昭広（1955）「古代日本語に於ける色名の性格」『国語国文』24-6

澤田田津子（1993）「日本語教育のための基本外来語について」『奈良教育大学紀要』42-1（人文・社会）

沢田奈保子（1992）「名詞の指定性と形容詞の限定性，描写性について―色彩名詞と色彩形容詞の使い分け要因の分析から―」『言語研究』102

三省堂編修所（2010）『コンサイスカタカナ語辞典 第４版』三省堂

柴田武（1988）「色名の語彙システム」『日本語学』7-1

藤村逸子（2003）「色彩名詞と色彩形容詞の対立―新聞と文学のコーパスからわかること―」（科学研究費補助金基盤研究（B）（2）（研究課題番号13480069）中間報告論文集『日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究』）

村中淑子（2015）「「グレー」と「灰色」について―外来語と和語の類義語ペアの使い分け事例として―」『現象と秩序』3

Berlin, B. & Kay, P.（1969）. *Basic Color Terms: Their universality and evolution.* CA: University of California Press.

Saussure, Ferdinand de（1949）. Cours de Linguistique Générale, publié par Charles Bally et Albert Sechehaye, Paris: Payot（＝1972, 小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店）

Color Terms in Loanwords in Japanese: Using the Full-Text Retrieval System "Himawari" of the Internet Library Aozora Bunko for Language Resources

MURANAKA Toshiko

In this article we studied color terms in loanwords in Japanese, and analyzed them using Corpus Data. We focused on ten color terms of English origin, using the full-text retrieval system "Himawari" of the internet library Aozora Bunko (12023 works, accessed October 1, 2014) for language resources, and observed examples from the Meiji period to the early Showa period.

The color terms studied were as follows: *PINKU* (pink), *GURIIN* (green), *BURUU* (blue), *GUREE* (gray), *BEEJU* (beige), *BURAUN* (brown), *REDDO* (red), *IEROO* (yellow), *HOWAITO* (white), and *BURAKKU* (black). Following the study, the terms were classified into two categories.

(a) Those having both an indicatory function in the context of multiple choice, and a descriptive function to describe attributes of things. They can be used independently but not in compound form. *PINKU* (pink), *GURIIN* (green), *BURUU* (blue), *GUREE* (gray), and *BEEJU* (beige) belong to this group.

(b) Those having only the indicatory function and no descriptive function. They are always used in compound form. *BURAUN* (brown), *REDDO* (red), *IEROO* (yellow), *HOWAITO* (white), and *BURAKKU* (black) belong to this group.

It may be said that words of group (a) are more familiar in Japanese than those of group (b), in particular *PINKU* and *GURIIN* as they describe the color of natural objects. In group (b), the reason why *REDDO* (red),

HOWAITO (white), and *BURAKKU* (black) have low familiarity in Japanese is that Japanese original color terms *AKA* (red), *SHIRO* (white), and *KURO* (black) constitute extremely basic and fundamental vocabulary in Japanese, and it is likely that there was no place for words of foreign origin having similar meaning.